A flaming flirtatious fraternisation

Reloaded

For adult only

mechi

Contents

Two Faces ph.1 3

Two Faces ph.2 27

Two Faces ph.3 クリスマスのおはなし 46

ギャンブル 63

失楽園 78

大したことじゃない 99

主導権 121

特別な日 139

id 158

ねがい 181

夜が明けるまで 192

このたびは、当同人誌を
お手にとっていただき、誠にありがとうございました。
お手に取って読みたいと思っていただき、ありがたく思います。

この本は、2020 年に発行した同人誌を受注頒布用に整えたものです。
お楽しみいただけましたら幸いです。

Two Faces ph.1

「あいしてる」
クロウリーがぼそぼそと呟いた。
その血色の悪い顔は床の絨毯の汚れのあたりを向いているけれど、たぶん、サングラスの奥の目線は私の顔色を伺っている。
「私も、愛してるよ」
精一杯頬をあげて微笑んで、彼が次に何を言い出すのか少し怖くて、無意識にワイングラスの縁を指先で撫で回していた。
「…は〜ァ！」
彼は、うんざりだという風にガックリ頭を垂れて立ち上がると、イライラと振り上げた両手で鮮やかな赤毛を掻きむしった。
「…俺は、アジラフェル、お前を、あいしてんだ！」
「わっ、私も…クロウリーのこと、愛してるけど…」
「そうじゃない！」
ザッツノット！と彼は歯をギリギリさせてあんまり唸るから、うっかり炎でも吐き出されちゃたまらないと焦った。私の住処は表向き古書店を営んでいる。可燃物だらけだから非常に危険で、私達ならちょっと焦げるくらいで済むけれど、数世紀をかけて収集した貴重な私のコレクションが失われてしまうのだけは避けたい。
「じゃないって…」
「アジラフェル！」
ソファに座る私を跨ぐように膝をついた悪魔は、勢いに任せて私の両肩を強く掴んだ。
「アジラフェル……？……怯えてんのか？」
「……ちょ、ちょっと、ちょっとだけ」
「…怖がらせて、ごめん…」
彼は、アメリカ大使のバカ息子がサタンの息子じゃないってわかった時より１００倍は狼狽して、私から体を離してこちらに細い背を向けた。
「酔っ払いが過ぎた、帰るわ」
酔っ払いとは程遠い確かな足取りで、スタスタと私の住処の出口に向かうその肩はがっくりと落ちている。